

リファンピシンにより甲状腺機能低下をきたした肺結核・結核性胸膜炎の1例

^{1,2,3}濱田 祐斗 ¹佐藤 暁幸 ²本島 新司

要旨：リファンピシン（RFP）は甲状腺機能低下症を誘発することが知られている。われわれは、RFPにより甲状腺機能低下をきたした肺結核・結核性胸膜炎の1例を報告する。持続する食思不振を呈した甲状腺機能低下症に対してレボチロキシンを併用することで結核治療を継続できた。症例は甲状腺疾患の既往がない85歳女性で、3カ月続く食思不振と体重減少を主訴に受診した。胸部X線で両側下肺に浸潤影と胸水を認め、さらにリンパ球優位の滲出性胸水、胸水 adenosine deaminase 高値（49.6 IU/l）、喀痰の結核菌群 polymerase chain reaction（PCR）陽性を認めたため、肺結核と結核性胸膜炎と診断し、RFPを含む抗結核薬4剤で治療を開始した。治療経過はよく、食思不振は一旦改善したが、第20病日から再度食思不振が出現し、さらに下肢浮腫や倦怠感などの症状を認めた。精査で甲状腺機能低下症が判明し、レボチロキシンを開始した。入院時は甲状腺機能正常であり、橋本病や、器質的な甲状腺異常を示唆する所見は認めなかった。レボチロキシンの投与により食思不振を含めた甲状腺機能低下に伴う症状は改善し、結核治療を継続できた。甲状腺疾患の既往がなく結核治療前に甲状腺機能が正常であっても、RFPによる甲状腺機能低下が起こる可能性がある。薬剤性の食思不振が考えられる場合であっても、食思不振が続く場合はRFP誘発性の甲状腺機能低下症を考える必要がある。

キーワード：リファンピシン、有害事象、甲状腺機能低下症、結核、橋本病